

第22回「水草研究会」全国大会を終えて

野 口 達 也 (東洋実業株式会社植物研究部)

大会を引き受けた者として、今大会の依頼から終了まで、特に今後の開催についての一助になればと思い報告します。

大会開催の依頼から会場の決定まで

1999年の秋に、角野先生から「栃木県で水草研究会」の全国大会をやってほしいと連絡があった。ここ10年ほどは、設立に関係した「すげの会」や「栃木県植物研究会」の運営が軌道に乗るように力を注いでいたために、「水草研究会」の全国大会にはずっと不参加であった。少々疎遠になっていた私のところにまで、全国大会開催の依頼が来るのだから、『なかなか大会の受け手がないのだなあ』と思った。栃木県で大会を開催するにあたっては、県内の水草の生育状況を考慮し、「流水性の水草」をテーマにしていけば可能と考えて、依頼を引き受けた。しかし、大会までの期間が十分でなく、講演会場には少々不安があった。はじめに、以前、「すげの会」第1回全国大会の時会場を利用させていただいた栃木県立博物館に、講演会場として使える場所があるかどうかを問い合わせたところ、『参加者の予想人数からすると、講堂を使うことになるだろうが、日程の都合上余裕がない』と断られた。そこで、近くの駅東の公民館や、距離的に少々問題のある作新学院大学などでの開催を考えていた。こんな中で、「栃木県植物研究会」の幹事会があったので、全国大会の共催か後援をいただけないものかとお願いましたが、『会の歴史が浅く、会員数も少ない弱小団体であるので、大会の支援は無理だろう』ということで断られた。しばらくして、本部から、『できるだけ宇都宮駅の近くに会場をとって欲しい』との強い要望があった。そこで、宇都宮大学農学部的小林幹夫教授に、会場を借りられないかどうかを問

い合わせたところ、『その程度の人数なら、冷房が効いて新しくよい教室がある』と紹介していただいたので、すぐに借用の手続きを取っていただいた。

宿泊先とエクスカーション用バスの検討

懇親会後も会員同士で話ができるようにと、団体で同じ宿泊施設を利用できないかどうかと考えて、宇都宮駅周辺の宿泊施設を訪ねて歩いたところが、宿泊施設の方に、『以前、医療関係の某学会の全国大会を世話したところキャンセルが多かったので、その後、旅館組合としては、学会関係の予約は、まとめて受けられない』ということで断られた。そのため、参加者の皆様方には、各自予約を取ってもらうようにさせていただいた。

また、『エクスカーションはバスで行なってほしい』との要望もあったので、バス会社や旅行社に問い合わせたところ、バスの利用料金が予想していた以上に高かった。申し込み期日までにエクスカーション参加者の人数が少なかったこともあったので、知人にスクールバスが利用できるかどうかを相談したところ、宇都宮と水戸で1台ずつチャーターすることができた。

観察コースの設定と下見

「水草研究会」の研究対象となっている分野が広範囲に及んでいるため、まず、観察対象を高等植物に偏らないように心がけた。しかし、観察時期やバスでの移動、所要時間、トイレの問題などもあるので、観察コースはそれなりに限定された。そこで、時期的に早めなイバラモ科やホシクサ科などの好観察地は省き、車軸藻植物を観察するというコースを設けた。ミズニラの群生地である相野沢の水路では、例年、7月に除草が行なわれて

いるので、できるだけ除草に手を抜いてもらえるように交渉してきた。しかし、下見のときにはかなり刈られている感があった。最終的な下見は、8月8日に安嶋隆氏(大型免許所持)を同行して行なった。

大会の準備、講演会とエクスカージョン

配布用資料の作成にあたっては、まず、栃木県産水草目録の配布を考え、いろいろな文献を検討した。次に、エクスカージョンの案内図や展示用標本の選抜・台紙貼り、栃木県地図や関係市町村のパンフレット入手などがあった。また、河川での観察が容易になるように、ガラス箱を10個あまり作成した(これらは観察会終了後、希望者には持ち帰っていただいた)。参加者名簿の作成は、申し込み期日を設けたにもかかわらず、期日を過ぎてからの申し込みや大会間近になってからの取り消しも相次いで、なかなか完成しなかった。また、講演も期限までに希望者が少なかったために、講演依頼という仕事もあった。さらに、演者からは講演要旨がほとんど届かず、大会間近に届いたものも推敲が不十分で、このまま配布するには問題があったので手直しを試みたが、難解な文章で予想外に時間がかかった。もう少し講演要旨が早めに届けば、ゆっくりと手直しもでき、テーマに沿った展示用標本の準備もできただろう。会場入口用の看板は、小林教授に作成していただいた。

1日目の講演会は、熱演(?)の連続で、進行がかなり遅れ、記念撮影は夕方となってしまったが、予定通り進行すれば、休憩時間も兼ねての撮影が可能になると思う。講演時などに飲み物をお配りしたが、夏の暑い気候が影響したせいかわかりませんが、すっきりした味わいのお茶のほうが好評だった。また、用意した果物やお茶菓子では意外にもお饅頭が好評だった。

2日目のエクスカージョンは、午前中時々霧雨が降り、盛夏であるにもかかわらず涼しい中で行

なうことができた。ノモトヒルムシロの生育地である「野元川」では、やや水量が多く、最初の観察ということもあってか、水の中にまで入って水草を見ようとする人は少なかった。しかし、次の「根古屋川」や続く「相野沢」では、参加者の方々も気分が乗ってきたようで、進んで水の中に入ったり、ガラス箱を使って観察していた。そして、最後の「鬼怒ふれあいビーチ」では、ナガフラスコモや河川の湿生植物などを観察して全行程を終了したが、この頃には天気もすっかり良くなっていった。

まとめ

会報71号が手元に届いて、大会初参加の山崎真実さんが、第22回全国大会の感想を投稿してくれたことがわかった。これは新しい試みで、主催者よりも参加者が感想を書くことのほうが様々な意見がわかり、主催者としては大変ありがたいことでした。今後は、もっと多くの感想を載せて会報を作成してもよいのではないのでしょうか。

宿泊施設は講演会場と一緒にまたは、近いほうが時間に融通がきき、何かと都合がよいと再認識しました。なお、旅館「伊万里」に宿泊された方から、『たいへん雰囲気の良い宿でした』という感想が届いております。

栃木県では、水草に興味をもって研究している人がほとんどいないので、水草の保護や生育地の保全については、手が差し伸べられていないのが現状です。そこで今後、栃木県で大会を開催するにあたって県立博物館を利用する場合は、2年前ぐらいに直接本部から連絡をとっていただいたほうが、講演会場ばかりでなく、企画展示場も確保できると思います。

なお、本稿をまとめるにあたり、第22回全国大会を多方面からご支援ご協力下さった小林幹夫教授をはじめ、渡辺一氏、安嶋隆氏、内山治男氏などの皆様方に、深く感謝いたします。